

青柳(あおやなぎ)本願寺創建の歴史を見直す
 取手市史社寺編により、**応永三年(1366)光明山伝
 教院本願寺は、浄土宗鎮西派知恩院末了普聖囿(りょ
 うよしやうげい)創立**とあります。

浄土宗と浄土真宗の歴史的な違いを理解しておか
 なければならぬので解りやすく説明します。

浄土宗は、法然により専修念仏が生まれた、承安
 (じょうあん)五年(1173)比叡山を下りてから、法然念
 仏が始まる。

後に空也、一遍、源信等によって全国に念仏は広

まり、その本山が京都知恩院である。
 更に徳川家康により芝増上寺を菩提寺とされた為
 浄土宗は規模を拡大して現在に至る。

取手の青柳本願寺は、この浄土宗鎮西派に属する。
 法然の跡継ぎは親鸞であるが、親鸞は真宗を開く。
 京都本願寺は文永九年(1192)親鸞により本願とさ
 れ、後に真宗大谷派として東北地方にまで広まった、
 浄土真宗である。

本願寺が東西に分かれたのは、慶長六年(1602)に
 東本願寺を創建した時に歴史が始まる。



浄土宗という浄土

真宗も同じと思われる
 が、教義は似たり寄つた
 りでも、歴史の道程は違
 うので混同しないよう
 注意が必要です。

特に大谷派に関する
 歴史は、本願寺によつて
 真実が伏せられている
 ようであり、親鸞の真実
 研究などが東洋哲学者
 梅腹猛等によつて行わ
 れている。

一・応永三年時代の青柳風景

南北朝の時代、果たして
 取手青柳に家を建て
 て 住めるような地
 形であったのだろうか。
 現在でも海拔2m程
 度の平地である。

将門の時代からこの
 辺り一帯での農業は垣
 内(かいと・小石で囲ん
 だ小さな田畑)と言われ

る、小さな輪住堤防のようなものをつくって営まれ
 る程度の農業で、農業者はいたことは分かっています
 すが、井野・台宿・大鹿山・寺田・稲といったここ
 るがポツンポツン湖沼に浮かんでいるような地勢で
 あったと想像していただいたらよいと思います。

そして目の前には「蘭沼(いぬま)」と香取海の一部
 が荒涼と広がっている地形でした。現在より水面の
 位置が高かった様なので沼地だったのではないでし
 ようか。この様な地に寺社を建てるとは思えません。

二・青柳本願寺を開山した聖囿さんのプロフィール

聖囿(しょうげい)は興国二年(1341)常陸岩瀬で
 生誕、父親は佐竹氏の重臣白石義忠 早くに戦死
 母によって佐竹氏の檀那寺である瓜連(うりづら)の
 常福寺住職了実(りやうじ)に預けられます。そして早くに了実
 の勧めで各所修学の旅に出されます。

十三年間遊行修学し、立派な僧侶になって帰国し
 ますと、了実(りやうじ)は常福寺を聖囿に後継しますが、それ
 から常福寺に落ち着くのではなく、各所遊行を続
 け、豊岡海道に法性寺を創建しました。

足繁(あしむら)北相馬の横曾根談場に通って弟子たちに、
 法然浄土教の本義・法門を説き、白旗派の門弟たち
 の養成にあたるなどした。

猿島に常繁寺を開基、至徳二年(1385)下総の千
 葉氏胤(ちか)の招きで教義を説きに向いたとき、氏胤の
 子徳寿丸(とくじゆうまる)は感銘をうけ、これまで信仰してきた真言
 宗を浄土宗に改宗して聖囿の弟子となる。

聖囿の足跡の一つはこの聖聡(しやうそう)※01を
 大きく育てたことです。

白旗派の本義と正脈を説く聖囿と共に、教団の規
 律を整え、法然上人後の多岐に分散している分派の
 収れん・教化・布教活動に力を入れ、聖囿の力を借
 りながらも江府貝塚(港区芝公園)に明徳四年(1383)
 に増上寺を開山します。

聖囿さんの行動エリアを追跡してみますと、常福
 寺から江府、相模(さま)へのぼる道は、官途(こうだ)常陸から
 の道は、大体が津頭(つがしら)・渡し場(わすしじやう)なので、目の

前の蘭沼を渡って布施・根戸・手賀沼(渡舟)・大津川・沼南大井(塚崎・大島田)・松戸・下総国府・墨田の須田・大井・沼部・菊名・鎌倉の道を歩いた。鎌倉古道下ノ道(したつみち)です。

しかしこの下ノ道は海岸に近くあまり足場が良くない。聖因さんも苦労されたと思います。

天永三年(1396)、「茨城県史」井野三輪台を仏縁の地と見て光明山本願寺を創建、「本願寺史」三輪台に上って地形を相し一寺を建立します。聖因56歳茨城県史では「井野三輪台」と井野地名が記されているが、井野ではなく高台であり、且つ街道筋である布施弁天山と思われます。

この当時、利根川(当時は常陸川や中川)を渡るには、七里ヶ渡ししか無いので、布施弁天山(亀甲山)か上記ルート上の意部山(※02おぶざん)と青山が考えられる高台でなくてはならない。

三輪台という場所から本願寺の適地を望み、土谷津の山に開基創建を決めたと思われる。

三・本願寺という地名が所在を立証する。

「我孫子市史」資料近世篇Iには、「三十五番字本願寺」・「三十六番字本願寺外」・「三十七番字本願寺沖」があります。

柏市史の「本願寺川洲」とあるが之は、弁天下(布施下)を流れる農業用水路の上にある台地に沿った湿地帯(これを指しているものであり、「三十五番字本願寺」・「三十六番字本願寺外」・「三十七番字本願寺沖」は、この台地の裾の縁(へり)をいいます。俗に、川洲のことは洲河・須珂・須賀などといいます。

「柏市史」資料四寛保三年下総国相馬郡布施村流作場新田検地の項「15」頁外の項に、《本願寺川洲(三ツ井戸方、サイメン沼、和田沼、(中略)此処でいう川洲は、洲河・洲此・須賀という》、《仮名草子》東海道名所記《東国の俗語に沙の集まりで小高きを須賀と謂う也》

四・「柏市史」資料編・富勢村誌152頁の雑項。

口伝。土谷津に往古本願寺てふ一刹あり、嘉永三年(1850)同じ下総なる青柳村に引き越しけるが、船にて七里ノ渡を渡るとき、本願寺沖にて釜を落としける云々。

此の名だたる荒所にて底も得知らぬ所なり。夫より取手の方へ出でけるなり」とあります。

今のところ嘉永三寅年とありますが、嘉永は七年(甲寅)ですが改元しておりまして、安政元年ですので、恐らくこれは寛永三丙寅(1696)の聴き違いか、印刷の誤植と思われる。

また、土谷津の飯田氏による口伝では、本願寺が青柳に移る際、檀家でもあった成島家が同行して移住された、という話が付随していました。

五・なぜ、須賀本願寺は取手の井野へ移ったのか

本願寺住職が布施から青柳に寺移りをした背景、これは開基時から教義布教乃至は僧籍者の念仏道場的な目的で創建された寺であったため、地域村民との親密度も浅く、稀薄で、寺と住民の間に馴染まないものがあつたのは否めないと思います。

富施の南龍寺と対抗するような地域に、新参の寺が檀家を獲得するのは難しいと思われます。

一方、川向うの青柳村は農業基盤の整備が進み、人口が増えはじめ、在地共同体側に沸々と、弔祭などを司る寺院を求める声があがり、同時に徳川家康の重鎮として名高い本多作左衛門への思慕・追善供養を期待する声望と共に、檀越の環境も整いつつあり、こうした村民の気運を小耳にはさんだ住職が心機一転、新天地での本願寺中興を決意したのでは無いでしょうか。

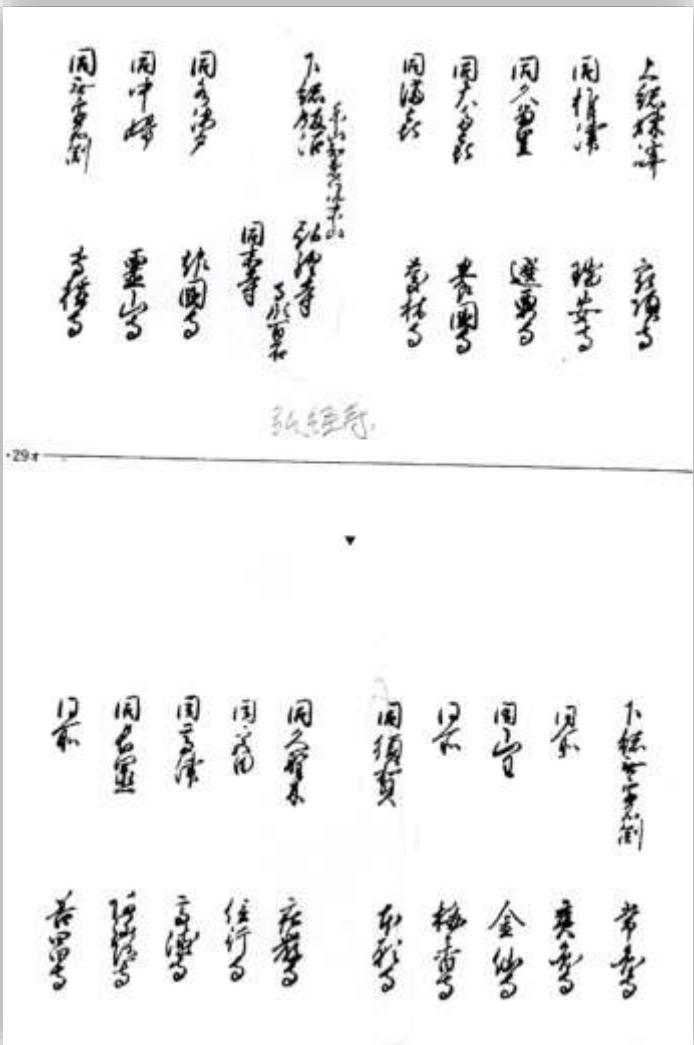
六・須賀本願寺という記録

寛永九壬申(みずのえさる)年(1692)増上寺末寺帳には「須賀本願寺」とある。

青柳本願寺に寺移りから6年経っているが、檀越はまだ固まっていない。須賀本願寺の方は青柳本願寺が中興が成ってから処理する考えなのか。

【上図説明】

上段に飯沼弘経寺、下段に須賀本願寺の文字が見られる



慶長元年本多作左衛門が亡くなった際、「寛政重修諸家譜」には遺骸を青柳本願寺に埋葬と記しているが、本当に本願寺に埋葬したのか、であればなぜ御墓山の墳墓が必要だったのか。

本多作左衛門の死去から150年後に編纂された「寛政譜」は、慶長元年(1625)7月16日井野において死す。享年六十八。法名高分。其の地青柳本願寺に葬る、と記しているが、青柳本願寺の在寺そのものが文献ではつきりするのは、寛永11年(1634)の伊奈検地による「青柳本願寺」の屋敷無、田畑百二十五畝十三歩の領有記録です。「取手市史」近世史料編「青柳検地統計表 895頁引用)

寛永三年(1626)丙寅)の口碑「土谷津と久寺家の境に宇本願寺という処がある。

口碑に古本願寺跡だと言われている。今の本願寺山であり、此処には井戸があつて、真夏でも水涸れしない。皆は上人井戸と呼んでいる。・・」と、「土谷津に往古本願寺という古刹があつた。

住職は嘉永三寅年(本田説は寛永三丙寅年)下総青柳村へ引越したが、舟で七里ノ渡をわたる時、釜を落としたそうな。・・などの口碑によつて、これまで応永三年開山とされてきた青柳本願寺説は、見事に覆されることになる。

この史料のおかげで、少なくとも寛永三年以前、取手に、本願寺が無かつたことがはっきりしたのです。この時の寺移りの住職は誰か、ですが、「取手市史」が十八世直誉(眞誉)を青柳本願寺八世直誉とし、すると、歴代十一世萬誉が一世ということになります。

布施本願寺は、一世了誉から十一世萬誉(青柳本願寺一世)寺移りまで(寛永三年)230年在寺。青柳本願寺は、十一世萬誉青柳本願寺から現住職まで385年です。

さらに、寛永九年(1632)増上寺了学編纂の「浄土宗増上寺末寺帳」から、下総須賀本願寺、の記述が発見され、下総青柳本願寺の記述がないことが判明しました。

これで寛永九年時点での青柳本願寺は無いことが

裏付けられました。また「寛政譜」に記す「作左衛門青柳本願寺に埋葬」の記述は誤りであることが文献の上で裏付けられました。作左衛門は青柳に浄土宗寺が無いがために自らの墳塋(ふんえい)、墓を作らざるを得なかつた。



「写真説明」

手前のビニールハウスのある広場にお寺があつたという、青柳本願寺跡と思われま。

この広場の一段低い空地は、現在駐車場になつているが、小高い丘陵地もかつては池であつた様で、スケートが出来たという。丘陵地は塵の山であるという。

丘陵地の先に見える林が「本願寺山」と言われるところで、

この林の左側に「本願寺沼」が広がっていた。遥か遠くに見える林が青山の大地で、その手前に国道6号が通っているのだが、写真では分りづらい。現在は「田中遊水地」と云われ、平素は田畑で農耕地が広がっている。

本願寺沼は、渡り鳥の休息地で多くの鴨や雁、白鳥や鷹などまで多くの鳥達がいた。またこれらの鳥達は狩りの恰好の獲物でもあつた様で、戦後はGHQにより乱獲されたと伝わる。

全文責・本田捷彦氏の講座資料コピー

※01、貞治(じょうじ)5年(正平21年7月10日生まれ。千葉胤胤の次男。浄土宗鎮西派の第八祖。聖因(しょうげい)が体系化した五重相伝の普及に勤め、おおくの弟子を養成。明徳4年武蔵貝塚(東京都)にあつた真言宗光明寺を浄土宗にあらため、増上寺を創建した。永享12年7月18日死去。75歳。下総千葉出身。俗名は千葉胤胤(たねあき)。号は大蓮社西誉(ゆうよ)。

本願寺沼周辺土地所有者割付図(部分)

弘化元年(1844)二月、相馬群布施沼 坂巻半平所蔵



※02 意部山、意部郷、於賦駅

「延喜式」所載の下総国最後の駅家は「於賦(おふ)」駅となる。ただし、例によって、その具体的な場所が不明である。

最近の研究によれば、承平年間(931~938)に編纂された「和名類聚抄」(略して「和名抄」)に記載されている相馬郡の「意部郷」という郷名と同じであり、この郷内にあったものと考えられる。

また、正倉院文書の中に「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍」というものがあり、養老5年というのは西暦七二一年で、「延喜式」の時代からは大きく遡るが、「倉麻郡」は相馬郡、「意布郷」は意部郷と同じものとされる。で、この戸籍に記載された人々の姓は殆どが「藤原部(ふじわらべ)」であるが、その後、台頭してきた藤原氏に遠慮して、天宝宝字5年(755)の勅により「久須波良部(くすはらべ)」に改姓させられてしまったということがわかっている。

ところで、千葉県我孫子市新木地区のいくつかの遺跡から「久須波良部」と記された墨書土器が発見された。その一つには「意布郷」の文字も合わせて記されたものがあり、これらの土器の年代が9世紀前半葉と中葉と判定されたことから、**我孫子市新木地区を中心に「意布(部)郷」があったことがほぼ確実になった。**

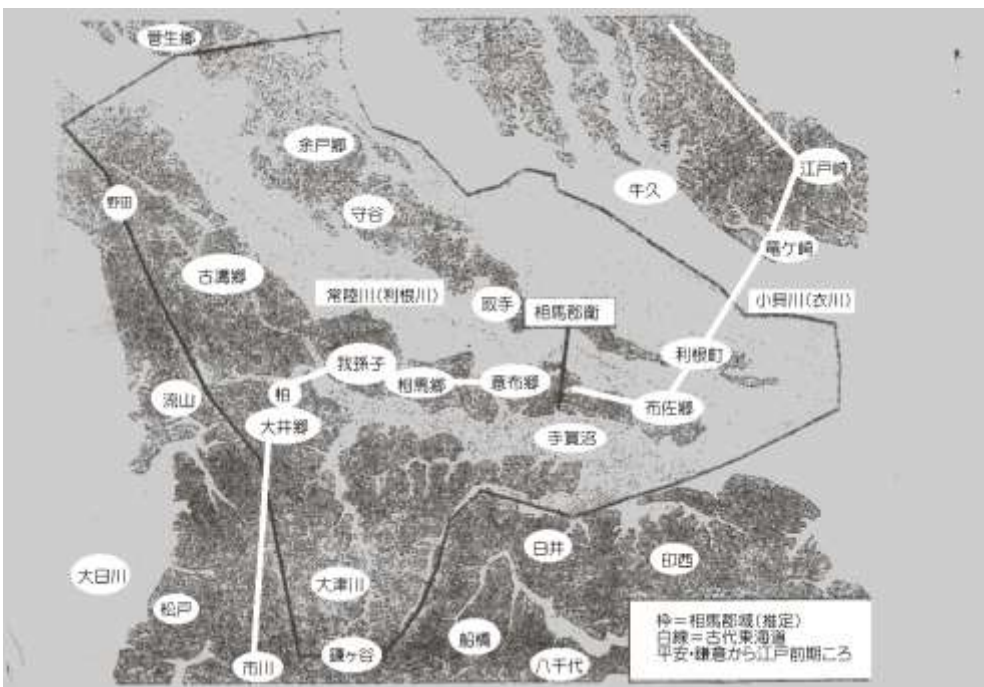
こうして、この新木地区と相馬郡家の正倉跡とされる「日秀西遺跡」とはかなり近い位置(遺跡群の中心に近いJR成田線「新木」駅は「日秀西遺跡」の東、約2km)にあることから、まだ見つからない相馬郡家と於賦駅家の所在地もこの付近にあったのだからという説が有力になっている。

なお、古代交通研究会会長木下良氏は、次の常陸国「榛谷」駅(茨城県龍ヶ崎市半田町付近?)への道が低湿地を通ることになるため、舟を利用することも考え、古代の我孫子台地の先端となる現・利根町役場(茨城県北相馬郡利根町布川)付近に想定している(木下良著「事典日本古代の道と駅」)。

ただし、古代の相馬郡には「布佐郷」があり、これが現在の我孫子市布佐付近だとすると、利根町役場は布佐の現・利根川対岸にある(古代には地続き?)。果たして、利根町役場付近は意部(布)郷に属したのだろうか。

ところで、下総国式内社「蛟蛸(こうもう)神社」(2013年1月5日記事参照)門の宮は、JR「新木駅」の東・約6km、利根町役場の北東・約3.5km(いずれも直線距離)の場所にある。

古代東海道の守護神であった可能性も考えられる。



《地図説明》
奈良時代以降、江戸時代前期頃の下総相馬地域の推定マップです。
黒い部分が陸地で、白い部分は海又は湿地帯を示し人間の居住地には適していない部分です。

白い線は古代東海道、鎌倉道と呼ばれた公道でした。旧来、柏く布施の七里ヶ渡しく戸頭経由説が有力でしたが、現在では手賀沼に痕跡が発見されています。

一、五百年く六百年(古墳時代後期)頃の大規模穴住居を主体とした大規模集落が日秀西遺跡や新木東遺跡で出土した。

二、七百年(奈良時代)に、相馬郡衛正倉が、現県立特別支援学校の敷地内で出土、郡の役人である郡司の事務所、曹司などの郡衛諸機関があった。郡衛諸機関の廻りの羽黒前、新木東台遺跡には堅穴建物の集落がありニュータウンを形成していたようです。

これ等の遺跡から「久須波良部」の姓が記された人名墨書土器、西大作遺跡から「意布郷久須部千依女(あぶごうくすべちよりめ)が出土している。

相馬郡の人々について記した奈良東大寺に残る「正倉院文書」下総国倉麻(そうま)郡意布郷養老五年(721)戸籍には「藤原部」の人名が多く記され、天平宝字元年(757)、藤原部は久須波良部に改姓されたとあります。

久須波良部墨書の出土から相馬郡意布郷が新木付近であることが判明しました。

我孫子市教育委員会 辻史郎 著

2014/08 記

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会

「須賀本願寺から青柳本願寺へ」年表

和暦(西暦)	須賀本願寺説、光明山伝教院本願寺、京都知恩院末寺(法然開祖)	誤説、既存説
明德 4 年(1393)	千葉氏胤の子「聖聡」により江府増上寺を開山	
応永 3 年(1396)	了譽聖罔(りょうよしょうげい)は、布施に訪れ、三輪台という所から、土谷津の丘陵地に本願寺開山を決意する。	聖罔により、井野の青柳に光明山本願寺開山。(取手市史茨城県史共)この時代の井野は泥地であり、寺院などを建てる場所ではない。
応永 21 年(1414)	大鹿山弘経寺開山、浄土宗鎮西派、芝増上寺触下	
永禄 3 年(1560)	桶狭間の戦、織田信長の天下、天正 10 年(1582) 本能寺の変、	
慶長元年(1596)	本多作左衛門重次没、井野の台地「御墓山」に埋葬。	誤伝、「寛政譜」では本多重次を存在しない本願寺に埋葬とある。
慶長 5 年(1600)	関が原の戦	
寛永 3 年(1626)	11 世拾蓮社萬誉和尚により、須賀本願寺は青柳に引越したと思われる。柏市史資料編富勢村史 152 雑頁	同行者に檀家成島家が井野に移住された、と飯田氏より拝聴した。嘉永 3 年(1851) と記述の間違えがあります。
寛永 9 年(1632)	「江戸幕府寺院本末帳集成」が 4～5 年かけて完成、「飯沼弘経寺」と「下総須賀本願寺」の記載がある。青柳本願寺の記載は無い。	
寛永 11 年(1634)	伊奈地検「青柳本願寺」の領有記録。	
明暦 5 年(1655)	新願寺を改め、浄土宗鎮西派青柳本願寺末「本泉寺」を開山。 15 世閑誉拾萬上人和尚。	
元禄 14 年(1701)	本多家一族 17 名が「断絶回向」のお詫び、18 世真誉上人大和尚応対。	
柏市史富勢村史 昭和 60 年 6 月	字本願寺：土谷地方二当リテ久寺家トノ間二字本願寺ト言フアリ。口碑ニヨレバ、古本願寺アリ。其ノ跡ハ今ノ本願寺山（飯田 豊次氏ノ所有）ナラン。此ノ辺モト塚ナド多ク、石片ナド数多アリシガ、今土字ナドニナレバ、殆形ナクナリ、源兵衛氏前坂ノ中段二井アリ。盛夏トイヘドモ水涸レズ。伝ヘテ本願寺ノ上人井ト（上人名ハ了譽ト言フ、七里渡参照。）。此ノ寺後北相馬郡青柳（今井野村ニアリ。）ニ移レリ。	
2015 年 3 月	本願寺山の一部所有者飯田氏の話 本願寺境内に「上人井戸」（しょうのいど）が、マンションの駐車場に近年まであり使われていた、が埋められてしまったそうです、井戸の縁には沢山の板碑が並んでいたが、一部が南龍寺などに保管されている。本願寺沼の一部も残っていたが、現在は残土の山と化している。	